


令和 4 年度「Kii-Plus 関西広域連合意見交換会支援プロジェクト」実施報告書

活動テーマ		公共交通の未来を「若人」と考える～沿線高校生との協働～	
キャッチ（タイトル）			
活動グループ	氏 名	所属・学年	
	（グループ代表） 岸本瑞生	観光学部	3 年
	（グループメンバー） 宮井凜晴	観光学部	3 年
	植田健太郎	観光学部	2 年
協力教員	氏 名	学 部	職 名
	西川一弘	紀伊半島価値共創基幹	准教授
グループ名		和歌山大学きのくに線活性化プロジェクト	
グループの公式 SNS/HP など URL（※1）		https://www.instagram.com/kinokuni_active/	
政策の概要		<p>地域の鉄道路線、いわゆるローカル線の存廃問題が深刻化している。一方で、ローカル線を活用して新たな価値のある地域資源を発掘することや、地域・沿線住民が鉄道にアイデンティティを発見するという事例も見受けられる。ローカル線を積極的に活用し、地域に効果的な影響を与えるためには、沿線住民の路線への関心を高めることが重要であると考えた。そこで私たちは、学校教育の場で地域交通の課題に向き合い、考え、行動するプログラムを創設する政策を提案したいと考え、関西広域連合に提出した。</p>	

調査活動内容	<p>関西広域連合に政策案を提出するにあたり、3回の打ち合わせと1回の現地調査を実施した。</p> <p>打ち合わせにおいては、以前から私たちが取り組んでいた題材であるきのくに線（JR 西日本）と和歌山県をベースに SWOT 分析を行い、公共交通のどのような分野にアプローチをすれば地域生活に効果的かを検討した。</p> <p>事例調査として、高知県立伊野商業高等学校ツーリズムコース3年生13人へのインタビュー調査を行った。同高校では、JR 四国の観光列車「四国土佐時代の夜明けのものがたり」において、車内での観光ガイドを実習プログラムとして実施している。インタビュー調査にあたっては、事前に Google フォームでのアンケート調査を実施したほか、現地にて観光列車に乗り、ガイドの様子を見学した。</p> <p>事例調査で得たデータや気づきをもとに、政策案を再構築し提出した。</p> <p>結果、意見交換会での発表には至らなかった。政策提案に至る根拠や、社会に与える効果について明示することができた一方で、具体的なプログラム内容が不足していたことで、政策を実施し、広げるイメージを十分に与えられなかったと考えている。</p> <p>また、政策提案の終了後、ターゲットであった高校生だけでなく、大学生にも視野を広げたいと考え、島根県内のローカル線・木次線で活動する大学生の団体「き♡線つながるプロジェクト」のメンバー2名にインタビュー調査を実施した。調査にあたっては、沿線を鉄道、自動車の両方で訪問した。</p>
調査活動写真（※2）	 <p>高知県立伊野商業高等学校でのヒアリング</p>



高知県立伊野商業高等学校でのヒアリング



「き♡線つながるプロジェクト」島根大学生へのヒアリング

調査活動成果

事前打ち合わせにおいて、SWOT 分析を行った。結果として、学生が公共交通利用の当事者であるが、関心度が低い点が明らかとなった。公共交通に関心の高い学生が増えることは、地域全体において公共交通の関心が高まるキーポイントになると考え、政策案の検討に至った。

また、事例調査において、伊野商業の 13 名に事前アンケートを行った。特に、設問「観光列車のガイドプログラムに参加することで、他の地域活動に参加するようになったり、社会に関心を持って様々な情報を集めたりするようになりましたか？」に対して、13 名中 7 名が「とてもそう思う」6 名が「そう思う」と回答したことが、鉄道を活用したプログラムによって、地域課題への関心まで広がる可能性を示唆していると考えた。現地で、活動に参加している高校生に直接話を聞くと、「自身の能力を伸ばすことができた」「地域で活動する住民や店舗との交流ができた」などの感想が挙がったほか、「JR の赤字の現状を知ることができた」といった声もあった。一方で、ガイドプログラムとしての共同作業、観光従事者的な視点からの評価もあり、公共交通自体の関心を大きく促進するプログラムを作る際の留意点を把握することができた。

「き♡線つながるプロジェクト」のヒアリングでは、活動に主体的に参画するメンバー 2 名から、「ローカル線をきっかけとして、地域に関心を持った」

	<p>「大学生が地域のローカル線に触れるきっかけを提供できた」という声を聞くことができた。大学生が主体となってローカル線を活用することで、地域に数年間滞在する大学生層への関心を高めることができるとわかった。政策提案には至らなかったものの、高校生に対して大学生がプログラムを提供することや、ローカル線を活用するプログラムを共同で行うことでより大きな効果がもたらされるのではないかと仮説を立てることができた。</p>
--	--

※1 必須ではありません。ある場合のみ記入してください。

※2 別途画像ファイルも合わせて提出してください。